

平成 24 年度 第 3 回 石狩市文化財保護審議会 議事録

■日時：平成 24 年 10 月 1 日（土）13:30～15:45

■会場：石狩市役所 403 会議室

■出席者

石狩市文化財保護審議会委員

- ・村山耀一
- ・百瀬響
- ・小杉康
- ・三浦泰之
- ・鈴木明彦
- ・加藤和子
- ・宮野裕子
- ・菅原晴美

事務局

- ・樋口幸廣（教育長）
- ・工藤義衛（文化財課長・学芸員）
- ・志賀健司（主査・学芸員）
- ・荒山千恵（主事・学芸員）

■欠席委員

なし

■傍聴者

なし

■議事

○会長あいさつ（省略）

○報告 平成 24 年度文化財関係事業について

荒山学芸員より説明

（※配布資料「中間事業報告書」「テンキ 2012・秋プロジェクト 制作者の募集」参照）

村山◆何か質問等ありませんか？

（質問等なし）

○菅原委員の自己紹介

（第 1、2 回に出席できなかつたため）（省略）

○協議 「これからの石狩市郷土資料の保存・展示のあり方等について」

（継続協議）

村山◆ではまず前回（8/1、8/3）、厚田・浜益の視察の感想を聴かせていただけますか？

百瀬◆まず質問ですが、（報告にあった 10 月のトークイベント）「ウミベオロジー」の「鯨塚」というのはどこにあるのですか？

工藤◆石狩湾新港の若干河口側です。そういう地名がかつてありました。

志賀◆地名だけで、今何か（塚などが）立っているわけではありません。

百瀬◆NHK で鯨塚、石碑についての番組を見たことがあります。

工藤◆クジラの供養の碑が明確にあるわけではありません。明治から大正にか

けての地図に、その期間だけ出て来る地名です。

百瀬◆クジラが揚がったんでしょうね。

工藤◆石狩の浜にはもうひとつ、クジラを示す「フンベ」のついた地名もあり、それで「ウミベオロジー」でも話をすることにしました。

百瀬◆「石狩といえば、あそビーチ」というのは私もそうだったので、今回実際に行ったことで、非常にいろいろな資源があるんだな、ということに気がつきました。白鳥番屋には開拓使が発行している教科書があって、後で調べたらおそらく石狩にしか残っていないことがわかって、もしかしたら石狩には、いろいろな資料も残っているんだな、と思いました。

小杉◆私は初めて厚田や浜益に行ったのですが、大変印象的でした。詳しくは後の協議のときに話しますが、非常に強く印象に残り、文化資源の活用という面では豊かな背景があることが、よくわかりました。

三浦◆自然の関係はよく知らなかったのですが、非常に豊かな資源があることが、あらためてわかりました。南北に非常に長く違いがあるという特徴をどう活用していくかが課題と思いました。

鈴木◆よく学生を連れて行くのですが、歴史のことはよく知らなかったので、あらためて理解することができました。あその後で北海道の学芸員の方と白鳥番屋を見学する機会がありましたが、たくさんの資料があるのを見て「こんなもの（資料館）があるとは全然知らなかった」と1時間くらい写真を撮りまくっていました。

加藤◆石狩は長い歴史があり、いろいろな文化財が眠っていることがわかりました。白鳥番屋もごちゃごちゃしているが、たくさんの資料を比較することができて、それも面白いな、と思います。

宮野◆私は白鳥番屋に行きまして、すごく懐かしかったんですね。生まれが利

尻島で、親が漁師をやっていました。小さい頃、モッコを背負ってニシンを運んだりした記憶が蘇ってきました。資料館があるって大事なんだな、と思いました。ぜひ資料を活用できる場所を必要です。ただハコ（施設）を作って資料を入れていくだけでなく、どういうふうにしていくのか、活用することが大事な、と思います。

菅原◆道東から石狩に来た時の最初の印象は、札幌に近くて、でも交通の便が悪くて、特に外部に「〇〇が有名だ」と発信しているわけでもなく、という印象でした。来てみて、すごいとわかったのは、自然に基づいた歴史と文化がある、ということです。自然と歴史・文化は別々のものではありません。サケ捕獲遺構としての紅葉山49号遺跡は北海道遺産に認定してもらってもいいもので、え？こんな凄いものがあるのに、なんでみんなに知られていないんだろう、というくらいでした。また、南北に長い分だけ地形など自然も違いがあり、同じ自治体の中でこれだけ多様な自然を体験できるのは凄いことです。ですから博物館の建物、収蔵、モノも大事ですが、一番大事なのは実際に石狩を歩いたり体験した人が、施設も利用しながら、何回も何回も石狩に来ていただくとか、どんどん石狩を好きになってもらうとかが大事です。ハコだけでもだめだし、屋外の体験だけでもだめなので、それをうまく繋げた形ができないだろうか。今、設備的には非常に厳しい状態で、学芸員さんたちが頑張ってくれているのですが、参加する行事はリピーターがとても多いです。遠くからでも、転勤してでも、石狩に来てくれる人はいるんです。それだけ魅力のあるところなので、発信のしかたや、博物館と体験ツアーとの組み合わせなどを工夫することによって、石狩の素晴らしさを理解してもらえるのではないか。場合によっては教育的な観光、例えば本州の修学旅行を受け入れるとか、プランを用意して来ていただくのも良いと思います。フィルムコミッションで石狩が取り上げられて映画の舞台になることも多い。農業もがんばっている。このように、良いところがいっぱいあります。

村山◆旧石狩は、団地ができてしばらくの間は「札幌指向」の住民が多かったが、20年30年と経って定着してくると、自分の街はどんなだったか、歴史はどうだったか、自然はどうだったか、知りたくなる方が増えてきました。それを調べるグループができたり、講座に参加するようになって、またリピーターと

いう形で聞いてみよう見てみよう、という動きが増えてきている。そういった中で、石狩の文化財はどうすればいいか。歴史だけでなく、自然や文化も含めて。そのあたりが今回の協議の重要な題材となるのではないのでしょうか。

(工藤課長より、郷土資料の保存と活用における現状、課題について説明 ※配布資料参照)

村山◆合併前の市や村が独自の資料館を作ってきたが、合併してあらためて見ると、どれも似た面が強い、建物、施設が老朽化している、資料館の活用に対する手立てが不十分である、といった問題があるわけです。このような現状からいって、石狩の資料館はどういう形であつたらいいのでしょうか。

小杉◆非常に大きな課題になっているのは、合併によって3つの資料館があること、それをどう活用したらいいのか、その3館のあり方を考えることが、「郷土資料の保存・展示のあり方」に具体的につながってきます。まずそこをテコにして考えていくといいと思います。

厚田資料室の特徴としては、人物に特化していることです。はまます資料館は、ごちゃごちゃしているが、それはそれで非常に魅力的である、という考えの方が多かったようです。砂丘の風資料館は一番新しいだけあって、現代的なニーズに応えたものです。これらの特色を逆にうまく活用する方法があるのでは、と思いました。南北に長く、車で厚田から浜益に向かうと急にトンネルが多くなり、地形が変わってきます。この南北の長さによる特色の違いをうまく活用できないか、と思いました。現状の課題として資料(収蔵)が各地に分散して活用しづらい、という点がありますが、むしろこの状況を活用することができるのではないかという印象を抱きました。日常的に文化財業務に携わる方は大変だと思いますが、全体的な感想としては、一極集中ではなく、逆に今ある状態をうまく活かして行く方向が考えられるのではないのでしょうか。

鈴木◆浜益は火山岩でできた地質になり、明らかに地形としても違いが出ています。それぞれ独自の地域性があります。その一方で自然としてはつながっています。石狩は氷河時代以降の砂丘、厚田は800万年前の深海の化石、浜益は火山活動を記録しています。そんな地球の歴史の流れを、たとえば砂丘の風資

料館で管理する、といったことができるかと思います。また、厚田の資料室をリニューアル前に見学したことがあります。漁具などを展示していたその時のほうが印象に残っています。人物のことを扱っていても、あまりピンとこない。学生を連れていっても4人を誰も知らなかったりする。それをテーマに人を呼ぶのは難しい気がする。自然史の面では、岩石や化石は腐らないとはいえ、放っておくとだんだんと劣化していきます。はまます資料館ではラベルが入れ違っていたり間違っていたりしました。砂丘の風資料館や海浜植物保護センターでは専門職員がいるからいいですが、厚田・浜益については、新たに岩石を採集するとか、化石の同定や保存処理をしなおすとか、必要であると感じました。

村山◆歴史の面では、明治以降の開拓の歴史は重要です。今の展示ではそこが欠けています。しかし現状では、それを展示する場所がありません。漁業の歴史、明治以降の開拓、現在に至る都市化という点と、地形、気候、植物、といった自然を、合わせて見ていかなければいけないと思います。特に開拓の歴史については不足かな、と思いました。

百瀬◆高校生のときに旭川の郷土資料館によく通ってました。入館料25円でした。が、違う地域に移転してしまっ行ってなくなってしまいました。今回回ったときに、この地域（厚田・浜益）の人たちが資料館を觀に旧石狩のほうへ出てくるのは大変じゃないか、と思いました。地域の方は、どうやって觀ることができるんだろう、と引っ掛かっていました。全体を統括する場所をどこかに作って、後は地域に残しておいたほうが良いのではないかと感じました。

菅原◆子どものリピーターがすごく大事だと思います。地域学習は小学3〜4年生でやりますが、副読本を見るだけでなく地域の博物館や産業など施設に見学に行きますが、そのときの印象が強くて、後で自分だけでもまた行きたい、と思うようになると、「これからの利用者」が増えて行くことになると思います。北海道開拓記念館では体験教室をやっていますが、リピーターは多いですね。大人だけでなく、子どもがそのように何回も来たくなるようなアイデアを加えていくと良いと思います。子どもは展示を見るだけではつまらなくて、「体験」ができるものを喜びます。例えば一升瓶で精米してみるとか、意外と一生懸命

にやります。だから、利用者の分析もして、地域に埋もれている資源（人材も含めて）を活用して、展示や収蔵だけではなく、人が触れ合える仕組みがあると良いです。資料館でもホネボラなど、本当にハマった子（小学生）は、交通の便が悪くても、1人で資料館まで来ます。臭い骨をきれいにするために。そういう子が1人でも2人でも増えるような仕組みが欲しい。なぜ資料を保存していくのかと言えば、それは孫・子の代のためです。子どもや、親の意見も取り入れ、いろいろな体験により、いかに子どもの「脳みその貯金」を増やせるか、を考えていってほしいです。

村山◆私は10年くらい前まで小中学校の教員をしていましたので、今のご意見は、よくわかります。今の石狩の実態として、各団体、施設などは、いろいろなメニューに工夫を凝らして、良くやっています。学校も、地域学習でいろいろな所に見学にも行っています。ただそこに、全体的な深まりがないんだらうな、という気がします。先生方が石狩の自然や歴史を把握して教えようとしたくても、現実には、時間がない、他所から赴任してきたばかりでまだ石狩のことを理解できていない、などの現実があります。ただ、そこに知恵を差し上げる、資料を差し上げる、ということができないのではないのでしょうか。それは資料館だけの責任ではなく、地域の教育全体の中でうまく連携しあえるような繋がり、情報交換を作ってあげないと発展しないのではないのでしょうか。私が思うには10年前も今も、あまり変わっていないんじゃないか、深まっていないんじゃないかと感じます。資料館だけでなく教育全体で、大人に対する講座だけでなく、いかに子どもに興味をもたせるか、そこが大事だと思います。

菅原◆浦幌町の例ですが、野鳥に詳しい高校の先生がPTAで野鳥教室を開催したところ、お父さんお母さん方が浦幌野鳥クラブという非常にアクティブな会を作りあげました。その活動が、浦幌の町立博物館の開設につながっていきました。PTAの行事などにも働きかけ、親も巻き込んでいくのもいいのではないのでしょうか。

宮野◆私は江別の郷土資料館で土器作りの会に入っているが、よく学校で土器作りの指導をします。グラウンドで野焼きもやります。親も来てくれて、みんなとても喜んでくれます。石狩でも、もし施設ができれば、そんなことができ

る広い場所が欲しいです。

加藤◆私もボランティア活動で、先日も花川南小学校で勾玉作りをやったのですが、「資料館に来たことのある人は？」と聞いたら、誰も手を挙げなかったんです。これは、先生方にももっと知ってもらわなきゃな、と思いました。また、砂丘の風資料館には、作業場がまったくありません。これはなんとかしたいです。

三浦◆石狩は南北に長く、合併した3市村で自然や歴史など、それぞれ異なる特徴ある背景を持っています。そこでは中核となるコアと、複数のサテライトからなるエコミュージアムの形態は非常に効果的だと思います。浜益なら浜益の現地に行って、その地域の自然や歴史を知ることのできる場所は大事です。その一方で、どこかに地域全体のまとめ的なこと知ることができる施設、というのはやはり必要です。また、歴史を研究している者としては、石狩・厚田・浜益というのは、江戸時代の歴史の上で他と違った特別な地です。地元の人、あるいは外からの人に、いかに資料や情報を伝えていくか、という観点は重要です。札幌で開催するトークと展示「ウミベオロジー」の目的としている、石狩浜を利用する多くの札幌の人たちにも石狩をよく知ってもらいたい、そして大事にしてもらいたい、という点は大事で、博物館も市民の利用と、外からの人たちの利用、という2つの柱は重要と思います。

村山◆石狩に来たときに、「石狩ってどんなところなんだろう？」と考えたときに、一発で「石狩って、こうなんだ！」と理解できる場所があって、そこで展示などを見てから、より詳しい地点に行くことができたらいいです。現在の3つの資料館では、それぞれ細かい地域のことはわかるけれど、初めて石狩に興味を持った人がやって来た場合に、全体像がわかりづらい。そこがわかるような展示が必要と思います。

加藤◆青森の美術館で棟方志功の作品のレプリカを見ましたが、するとやっぱり本物を見たくなりました。それと同じように、まずコアに来て例えば厚田に関する展示を見て、これの本物は厚田に行けば見れますよ、という形は良いのではないのでしょうか。また、資料館には展示を見に来るだけではなくて、人に

会いに来る、ということもあっていいのではないのでしょうか。先日、私がボランティアをやっている砂丘の風資料館に家族連れが来ましたが、子どもに見覚えがありました。聞いてみると、「こないだ学校で見学に来て、とっても面白かったから、家族も連れてきた」と言ってくれました。そんな風に、来てくれる人と地元の人との触れ合いの場になってくれると良いです。

百瀬◆春に学生を連れて、岩手の遠野に行きました。そこでは、街中を博物館化する、という活動をしています。8月にハママシケ陣屋跡に行ったら、デジャブか？と思うくらい雰囲気そっくりでした。どちらも草刈りもしていないようなところがあったりするのですが、非常に良い所です。石狩も、このままでも十分に見所になると思います。あとは、どう使うか、という問題です。それと、できれば来年でも、教員向けの講習会など開いてはどうでしょう？

菅原◆本当にそう思います。新任研修などなら学校の仕事として行くことができます。昔の生活の体験などさせれば、電気が停まっても子どもたちを守るテクニックにも繋がります。教員は、日頃の業務が忙しすぎるため、なかなかそんな機会に参加できませんが、新任研修や教員養成など、これが仕事だよ、という位置づけになれば、参加しやすくなります。最初は強制でも、その後主体的な活動につながります。大人が好きになって、それによって子どもも、もっともっと好きになってくれれば、石狩を大事にしようという気持ちはますます強くなります。そんなふうに石狩の自然や歴史を愛してくれる人はたくさんいますので、そんな資源をうまく活用する仕組みを作って、建物を効率的に配置すると良いです。知床や今金などうまくやっています。石狩と地理的環境や人口構成などが似ている地域を参考にして、この素晴らしい資源をどのように次世代に残すか、そんな博物館の構想はとても重要です。

村山◆石狩でも、昔の遊び、土器作り、講座など、資料館や、いろんな所でやっています。しかしそれが学校ではわからない。忙しいというだけでなく、情報が入ってこなかったり、チラシ等も学校内で回っているかという疑問がある。学校と社会教育と繋がり合わせる、先生方にもある程度強制的に参加してもらって、情報交流もし、その中から必要なものを使ってカリキュラムを作っていく。こういう手助けがあると良いと思います。さて、保存・展示のあり方

としては、どうでしょうか？

小杉◆柱になるのは、エコミュージアムとしての取り組みで、これが非常に重要と感じました。コアミュージアムとサテライトをどのように選択するのが大事です。ガイド施設や展示施設をどこかに設けて、そしてサテライトを選定していく。石狩では地域が広く長いですから、コアミュージアム1ヶ所ではなく、「サブコア」ミュージアムのようなものを設定して、何ヶ所かに分散してもいいかと思います。それが厚田や浜益の既存の施設を活用する1つの手法だと思いました。また、はまます郷土資料館（白鳥番屋）は、はっきり言うと一時代前の展示です。しかし、あのような展示はかつては全国にありましたが、ここ10〜20年の間でどんどんなくなっています。そこで、あの展示そのものが1つの文化資源である、という考え方もできるかもしれません。背景にはもちろん最新の研究成果を反映させ、解説内容なども直さなければいけません。その上で、あのような展示を残すことができれば、文化的に非常に特色のあるものになり、重要なサテライトとなります。

コアミュージアムでは、各々のサテライトの紹介があり、利用者の興味や体力に合わせて行きたい所を選んで出かけて行く、という形になります。出かけていった先のサテライトでは、地元の人によるガイドがいると望ましいです。油田や、望来の風景など、とても素晴らしいサテライトになると思います。構築するに当たって、そんなサテライトを組織的に探す、選んでいく、という活動をやってはどうかと思います。エコミュージアムというのは「活動」そのものです。「エコミュージアムができました、参加しましょう」というだけではなく、作る過程、維持する過程という活動です。その過程に学校教育も組み込むことができるでしょう。それだけの文化資源、地域資源として、十分なポテンシャルを持っています。

また、単に利用者に興味に合わせてサテライト、ルートを選んでもらうだけではなく、こちらからもテーマを決めたモデルコースを提供することも必要ではないでしょうか。

鈴木◆イギリスでは「ネイチャー・トレイル」というようなものがあります。こちらの厚田や浜益くらいの規模の地区ごとに1つ、必ずビジターセンターがあります。そこでは、危険や禁止など注意事項を書いたリーフレットをくれた

り、地質・化石用のハンマーを貸してくれたりします。化石のレプリカを売っていたり論文集を売っているなど、利用者のレベルに合わせて提供できるものが何種類か揃っています。子どもたちや、毎年来るリピーターなども利用します。トレイル（道筋）などは、地域から自然発生的にできてきたそうです。石狩でも同じように素材がたくさんあります。リーフレットや一般の方につけやすい資料などがあれば、それを持って現地にアクセスしていくことができます。今はネットで公開もできますが、配布できるもので、いろいろな分野のものがあれば、利用者がサテライトを回って行く際に活用できます。

小杉◆「誰のために」という点をはっきりしておくことが重要です。第1にはもちろん市民の方です。それに加えて、観光客というのも非常に大事です。市民の方というのは、愛着はあっても、意外と具体的な活動に出ることがありません。意外と自分の身近なものに対する価値がわからないことが多いです。実は観光に来る方のほうがその地域の魅力を知っている、というケースがかなりあります。そういう意味では、第2に、石狩に観光にくる方、興味を持っている方をうまく取り込むことが、逆に石狩の価値を再発見させる非常にいい機会となります。市外の人を対象として念頭に置くことは非常に良いと思います。第3には子どもたちです。子どもたちに良い情報・知識を提供していく、これはつまり次の世代・将来に遺産を残していくこととなります。彼らに働きかける整備が非常に重要です。

百瀬◆連続講座「石狩大学博物学部」は会場は市民図書館ですが、資料館ではないのは、なぜですか？

志賀◆資料館に講座をやる場所がないことと、大勢の人が来やすいように、人口の集中する花川地区にしています。

百瀬◆そういう意味で、花川地区にコアがあると良い、となりますね。作業をするような場所は資料館にはあるのですか？

志賀◆ありません。ボランティアによる骨格標本製作も、臭いが強いために、僕しか職員がいない日に事務室でやっています。

村山◆先ほど観光、という話がありましたが、現地に看板のようなものがちよつとあるだけでも効果的です。厚田油田跡も、現地に1つ案内があれば、ふらつと寄る人も増えるのではないかと思います。

菅原◆GIS やスマートフォンなどのアプリを開発して、電子地図のような形で情報をどんどん貼り付けていくという形も考えられます。看板などができるようになる前でも、予算をかけずに案内図やモデルプランを提供することができるかもしれません。学生など若い人の力を借りると、いろいろアイデアが出てくるかもしれません。

○事務局より連絡

各委員へ、答申に際しての意見をまとめた文書の提出を依頼。次回日程の調整。

○教育長あいさつ（省略）

以上

議事録を確認しました。

平成 24 年 10 月 8 日

石狩市文化財保護審議会

会長 村山耀一